

滋賀森林インストラクター会

2018年度 第2回研修会報告

日 時：2018年8月12日（日）10：00～14：00

場 所：河辺いきものの森（東近江市）

参加者：小西、下川、高橋、関澤、橋木 計5名

内容

河辺いきものの森は、愛知川沿いに広がる「河辺林」で、全国的にも珍しい平地の森です。

かつては水害防備や薪柴を採取する人々の暮らしに身近な里山の姿でしたが、時代の流れとともにその役割がなくなり、管理が放棄されるなどして植生が進んだり、竹に覆われるなどしていったため、市民ボランティア団体が里山保全活動をはじめ、現在も継続して行われています。（パンフより）

この日、立秋は過ぎていましたが、今年の異常な猛暑はまだまだ衰える気配もなく、集合場所の駐車場から、熱気で萎えそうな気持ちを奮い立たせて出発しました。

森の入り口で、アオナラガシワの葉に①ノシメトンボ、向かいのクマノミズキに②アゲハモドキを見つけました。「アオナラガシワは、ナラガシワの変種で葉裏に毛が少なく白っぽいのだが、これはコナラと交雑しているかも？」と小西さん。ブナ科のコナラ属では交雑が結構多いそうです。さらに③ミソナオシなどという変わった名前の草状の小低木もありました。また、この池で発生したのでしょうか、小さな池の周辺にたくさんの④ハグロトンボがとまっていました。

ようやくネイチャーセンターに到着し、一息ついて観察路に出発です。

今回の研修も、9月9日開催の「緑の少年団指導者研修会」の下見を兼ねています。

まず、研修テーマの危険生物について、見られたのは、触れるとかぶれる⑤ヤマハゼ、⑥ツタウルシ、ヌルデでした。ヤマウルシは見かけませんでした。

ほかに主だった木本としては、シラキ、アラカシ、シラカシ、コナラ、クヌギ、ケヤキ、アベマキ、カマツカ、コマユミ、ゴンズイ⑦⑧、タラノキ、メダラ、ケンポナシ、カゴノキ、イタヤカエデ、ヤマモミジ、つる性植物のヒメドコロ、イタビカズラ、草本では、⑨タコノアシ、絶滅危惧種の⑩ハイハマボッサ、エビネ、ヨウシュヤマゴボウ、オオバギボウシ、水辺にヒメガマ、コカナダモなどを観察しました。

今回の研修は暑さの厳しい日でしたが、見慣れない植物がいろいろありました。また、動けない植物たちの猛暑対策を垣間見た気がします。森の中とはいえ、地面も乾ききっていて、どの樹木も葉が垂れ気味だったり、枯れそうだったり・・・でも、よくよくみると、葉をくっつけながら垂ら

しているアオキ⑬は、蒸散を防ぐ作戦のように見えます。どの葉もクルリと巻いているササ⑭は乾燥した結果なのか、表面積を小さくしてやはり蒸散を最小限にする作戦なのか、そして枯れそう！に見えたウワミズザクラは無駄な抵抗はせずに早々に葉を落として、来年のために力を蓄えているのかもしれません。そうした植物たちの生き残り作戦に感心した1日でもありました。

(文責 橋木啓子)



① ノシメトンボ
トンボ科
河川や湿地、水田、池などの周辺で見られる 翅の先端が褐色



② アゲハモドキ アゲハモドキ科
丘陵～山 蝶のジャコウアゲハに似るが、触覚の先が玉状でないことで識別 蛾の仲間



③ ミソナオシ マメ科 ヌスビトハギ属
低山地の林縁や道ばたに生える小低木
3小葉で互生 葉柄に狭い翼がある 葉の表面に光沢



④ ハグロトンボ カワトンボ科
河川とその周辺の草原や林で見られる



⑤ ヤマハゼ ウルシ科ウルシ属
奇数羽状複葉 小葉は4～8対 全縁



⑥ ツタウルシ
ウルシ科ウルシ属
三出複葉
小葉は3枚
つる性の木本
若い葉には鋸歯がある



⑦ ゴンズイ ミツバウツギ科 ゴンズイ属
 奇数羽状複葉が対生する 小葉は3~4対
 熟すと裂けて黒い種子を出す
 果皮はふつう赤く熟す



⑧ ゴンズイ 果皮が熟しても白いもの



⑨ タコノアシ ユキノシタ科タコノアシ属
 湿地に生える多年草 花や実がびっしり並んだ
 花序を吸盤の多いタコの足に見立てた
 まだ花も付いていない時期にはわかりにくい



⑩ ハイハマボツス
 サクラソウ科ハイハマボツス属
 海岸に近い湿地や、内陸部や沼のほとりに
 自生する多年草
 準絶滅危惧種



⑪ アオキ
 アオキ科アオキ属
 常緑低木
 雌雄別株
 葉は対生



⑫ ササ